

Introduction

志木高…半年は桜の花見シーズンである

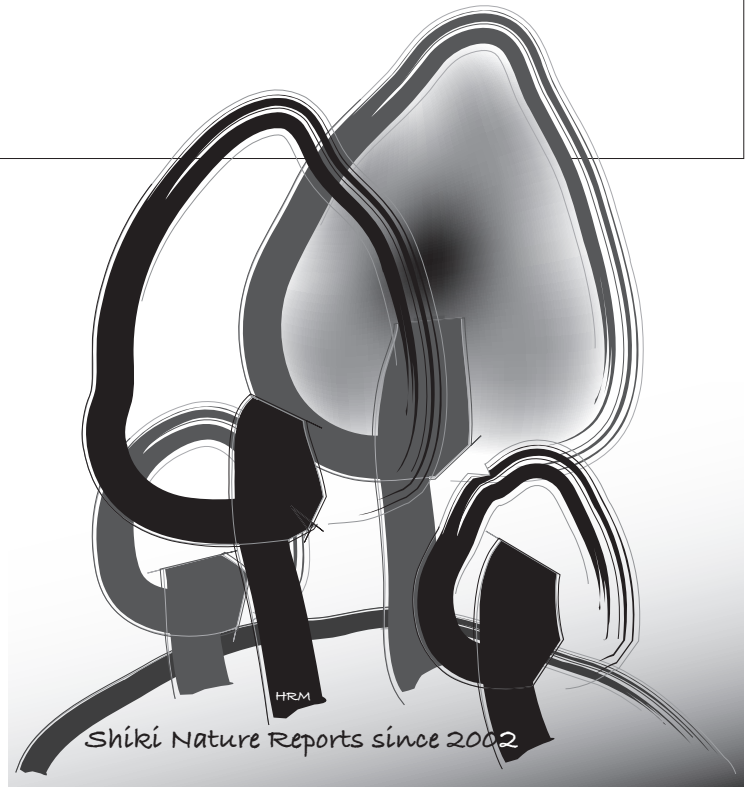
新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。2、3年生の皆さん無事の進級（一部例外あり）おめでとうございます。

2002年から発行されている本紙は、今年も入試面接の際に「迂闊にも」志望動機を『豊かな自然の中で勉強したいからです』などと答えてしまった貴兄らに「自然の豊かさ」を知ってもらう為に発行されます。

さて、今年は天候にも恵まれ、3/31には東京での開花宣言がなされました。

新入生の皆さんも満開の桜に迎えられた事と思います。本校は200種近い樹木をこのキャンパス内で見ることができますが、桜だけでも、5種を超えます。昨年の記録では、一般に「冬桜」と呼ばれるジュウガツザクラが11月末に開花しており、4月まで花を見る事ができます。この間に、カワヅザクラ、カンヒザクラ等が次々と開花していき、新入生を満開で迎えたソメイヨシノが4月上旬に開花します。同時期に八重のサトザクラが花開きはじめ、4月末日まで咲き続けます。4月の下旬から5月上旬にかけてはイヌザクラの房状の小さな白い花を愛でる事ができます。このように、志木高では『桜の花見』がほぼ半年にわたって楽しめる訳です（…あまり有難味がありませんね）。

主だったサクラの開花期は下に、咲いている場所は次の頁に掲載します。気が向いたら足を運び、どのような花が咲いているか、確認してみてください。



志木高の主な『サクラ』の開花期

	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
ジュウガツザクラ							
カワヅザクラ							
カンヒザクラ							
ソメイヨシノ							
サトザクラ							
イヌザクラ							

この『四季』の発行は原則的に長期休暇明けの最初のHRとしていますが、4-7月は膨大な種類の植物が開花するため、6-7月にも一回発行します。これを期に、本校の自然に親しんでいってください。

(Miyahashi)

志木の自然[睦月(1月), 如月(2月), 弥生(3月), 卯月(4月)]

Plants [2005年1月~2005年4月までの記録]

木の芽時は、構内のあちこちで様々な花が一斉に開くので気が抜けない。今年は、イヌシデ、アカシデ、ケヤキ、ポプラ等、雄花が穂になるものの開花がずいぶん目立った。また、雑感として春の花であるホトケノザの個体数が急速に減少し、一方で同じシソ科のヒメオドリコソウが急増しているのが気にかかる。

Grass

20th Feb. 2005 ナズナ、タネツケバナ、ヒメオドリコソウ、オオイヌノフグリ開花。
21st Mar. 2005 カタバミ、カントウタンポポ、ハナニラ開花。
31st Mar. 2005 マルバスマシ、ショカツサイ(ハナダイコン)、ムラサキケマン、フキ開花。
6th Apr. 2005 カタクリ、スズメノエンドウ、ヘビイチゴ開花。

Wood



この限られた紙面では、名前の出ている植物や動物がどのようなものであるかをお示しする事は不可能です。名前を手がかりにぜひ図書館で一度調べてみてください。

(Miyahashi)

志木高構内の気温変化(2004年度)

1999年度より校内で10分ごとの気象観測を行っています(もちろん自動化されている)。観測している気象要素は、気温のほか気圧、風向・風速、降水量(雪を除く)、湿度、太陽放射量、紫外線インデックス等です。グラフは2004年度(2004年4月1日～2005年3月30日、一部欠測日あり)一年間の気温変化です。

昨年度は真夏日(30℃を超える日)や冬の早朝に氷点下を記録した日が多かったことがグラフから読み取れます。7月20日、夏の太平洋高気圧に覆われた晴天、北西の風によるフェーン現象、ヒートアイランド現象と海風の減少が重なり、東京の都心部で史上最高となる39.5℃を記録したことは印象的でしたが、同じ日、志木校では36.9℃を記録しました。

(Higuchi)

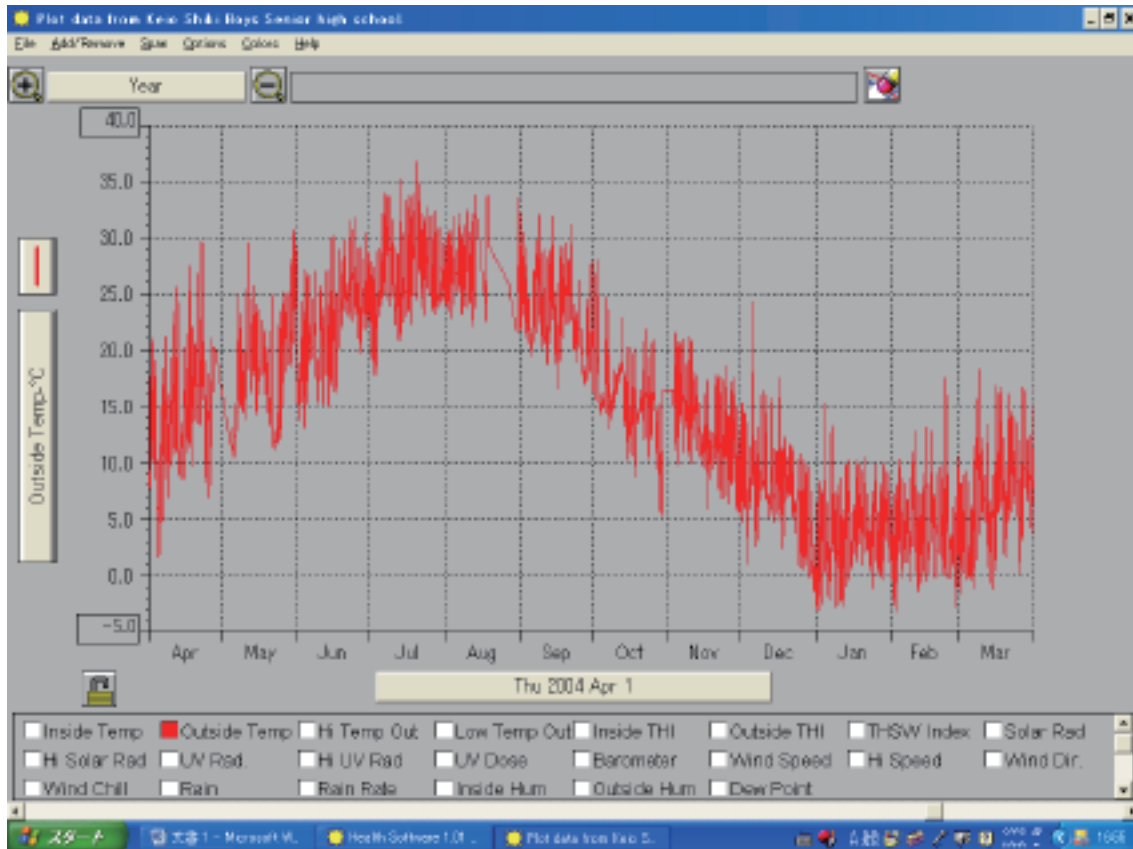


図 2004年度の年間気温変化. 縦軸の単位は[℃]

志木高の動物・鳥類

Animals

本校では、豊かな植物相を土台に数多くの動物が集まります。特に鳥類は豊富で、今年の一月から確認されたものは、キジバト、ドバト、ハシボソガラス、ハシブトガラス、コゲラ、スズメ、オナガ、シジュウカラ、アオジ、ムクドリ、ヒヨドリ、ツグミ、メジロ、シロハラ、カルガモ、ハクセキレイ等です。

しばらく途絶えていた本校防火用水(教員室直下)でのカルガモの孵化も昨年はネコの被害に遭いながら1羽が無事巣立ちました。今年も既に何度か、カルガモの来訪がありましたが定着には至っていないようです。

生物室南側の池では、3/23前後にヒキガエルの子が産卵がありましたが、2004年では3/15に産卵確認をしていますので、約1週間遅れ、という事になります。

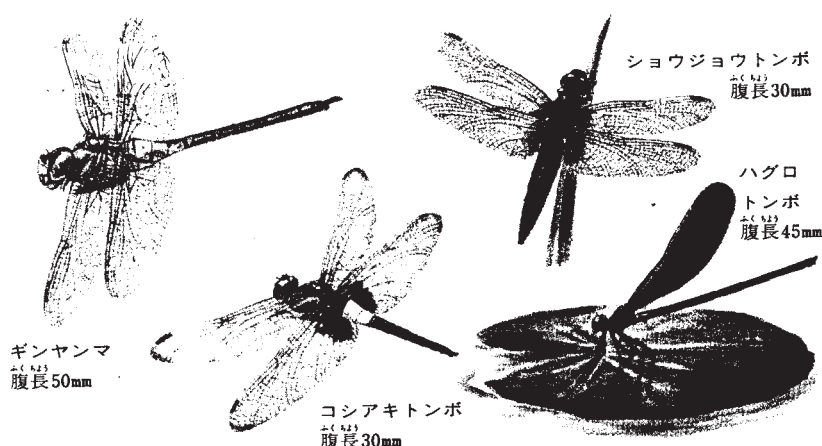
(Miyahashi)

ビオトープ池(其の2)「トンボから見たビオトープ池」

生物室脇の池には、今年も3月半ば過ぎにヒキガエルが十数匹群れて産卵しました。昨年より多くのカエルが訪れたようで、この池も産卵場所としてすっかり定着したように思います。野火止用水がなくなって30年、この池は校内の生物にとって貴重な水辺の環境となっていますし、カエルの産卵は失われていた水辺の生態系復活の兆しかもしれません。

しかしビオトープのコンセプトは本来、閉鎖系ではなく、都市の中に点在する小環境どうしをネットワークさせることで、全体として大きな自然生態系を都市と共存させようという点にあります。したがって我が校のビオトープ池も校内だけではなく、外の水環境との連携が一つのねらいです。例えばトンボを例に取りましょう。皆さんご存知の通りトンボは幼虫時代はヤゴとして水中で過します。つまりトンボの生息域は水環境の有無が決定要因になります。校内でもシオカラトンボ、アカネ属のいわゆる赤トンボ等によく見られます。これらのトンボは実は外から飛んで来るものが多いのです。その移動距離は数十kmとも数百kmとも言われます。しかし一方で移動距離が1, 2km程度というトンボもいます。イトトンボの仲間などです。校外の水環境はというと、北に約1.5kmに新河岸川、南に約2.8kmに平林寺を流れる現存の野火止用水、南東に約1.2kmに黒目川が流れています。校内のビオトープ池はこれらの中心にあり、飛距離の短いトンボにとっても移動可能と思われ、大切な中継点となるのではないのでしょうか。実際、生物部の調査では昨年、生物室脇の池でアジアイトトンボが確認されました。私達の気付かない間に、道路やマンションを飛び越えて、様々な生物達のはるばる移動してくるのです。皆さんもぜひ校内でそういった生物達を見つけてみて下さい。

(Izawa)



『野山の昆虫』 小学館より

お断り

今回は本井先生の俳句はお休みです(というより、原稿の依頼が遅れました…申し訳ありません)。次号を御期待ください。

執筆・担当区分	俳句	本井 英 (Motoi)
	動物・環境	井澤 智浩 (Izawa)
	天文・気象	樋口 聡 (Higuchi)
	鳥類・植物	速水 淳子 (Hayami)
	植物・小動物[&発行責任]	宮橋 裕司 (Miyahashi)